特47-645
1200500896348
特47
645

少年讀物

寿命帳

国立国会図書館

2G

仰天子作秋香画

少年讀物

壽命帳

257
496

特47
645

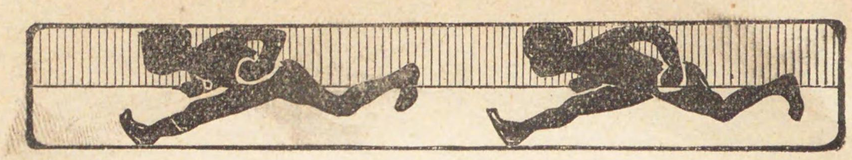
この壽命帳を始め、引續いて出版する少年讀物は、いづれも少年少女方が、面白がって讀まれる内に、知らず〳〵、多くの智識を得られるよーにと思って、作者も面白がって書いたのですから、どうか其のお積りで御覽下さい。

明治四十一年六月

武田仰天子しるす

明治
41 7 9
内交

我が愛する少年諸君よ
我が愛する少女諸君よ



少年讀物

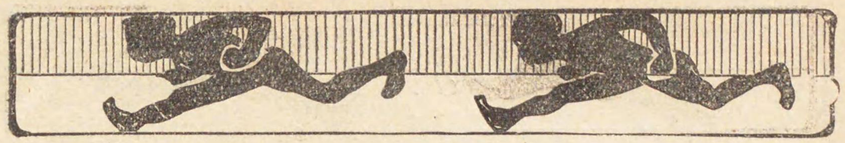
壽命帳

武田仰天子作
富田秋香畫

(一)

地獄の閻魔大王が、命帳といふ帳面を披げて、鈍栗眼を光らせながら、壽世界中の人間の、生れた者や死んだ者や、養生の好い者や惡い者やを、せっせと取調べて居ました。

その時其所へ來ましたのは、虎の皮の褌を締め



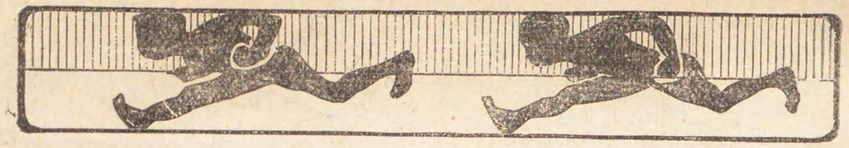
た赤い鬼で、丁寧にお辭儀を爲て、『閻魔様、私は今日は、日本を見回って參りました。』と言ひながら、帳面の開いてある所を見遣って、『あ、丁度其所へ、書入れて頂きたい事がございます。』と言ひました。

閻魔は髯を弄りながら、『此所に書いてある日本人の内に、不養生な者でもあったか。』

赤鬼、『いえ、赤坊が生れたんでございます。』

閻魔、『何の家へ生れたか。』

赤鬼、『其所にございます桐山の家に一人と、隣



りの菊本の家に一人と、同じ日に、二人揃って生れました。そして何方も男の子でございます。』

閻魔、『さうか。それではまづ桐山の方から聞かう。赤坊の名は何と言ふか。』

赤鬼、『太郎と申します。』

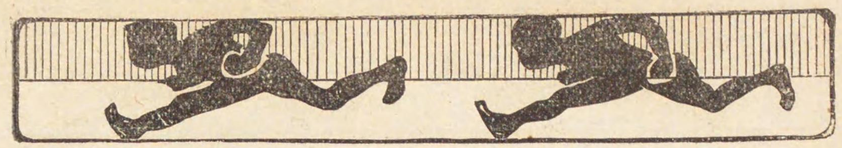
閻魔、『丈夫な子供か、弱い子供か。』

赤鬼、『大層丈夫な子でございます。第一身體が大きくって、加之に丸々肥太って、その強さうな事と申しましたら、そりゃあ恰で……、』

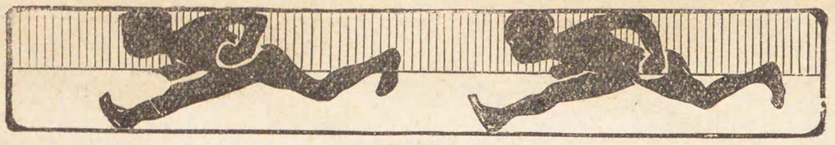
閻魔はにっと笑ひながら、『お前のよーなか。鬼

のよーなか、』

赤鬼も同じく笑って、額の角を撫でながら、『御冗談を仰しゃいますよ。全く太郎は達者な子で、殺したって死にさうには有りません。それ位でございますから、本人の壽命の所は、澤山に與へてお遣り下さいまし。』



閻魔は筆を取上げて、桐山の人達の名前の次へ、太郎と大きく書入れました。それから其の脇の方へ、太郎を生きさせて置くだけの年の數を、書添へるのですけれど、赤鬼が今のよーに言人の壽命は大切な物ですから、きません。じっと暫くたって、なか〳〵直には書親も、大層丈夫に生く考へてから、『この太郎の父の壽命が與へてあつれて來たから、すでに七十歳て、今に達者で暮して居るが、その父親が生れた時と、今度生れた赤坊とは、何方が丈夫か。』と念を入れて問ねました。



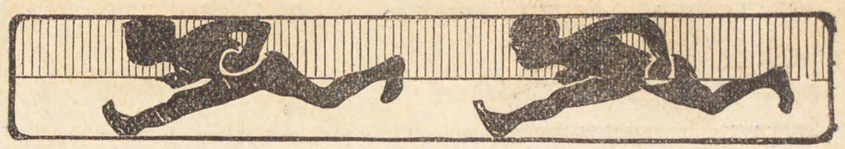
赤鬼、『そりゃあ父親の赤坊の時よりは、今度生れました太郎の方が、餘ぽど丈夫でございます。太郎は親優りでございます。』

閻魔は始めて、『それでは太郎を、八十まで生きさせて遣らうよ、』と言ひながら、名前の脇へ、八十歳と書添へました。

赤鬼、『それから菊本の赤坊でございますが、これは清と申します。』

閻魔、『そして丈夫な子か弱い子か。』

赤鬼、『清は太郎と大違ひで、痛々しいほど痩



衰へた、小い弱い子でございます。』

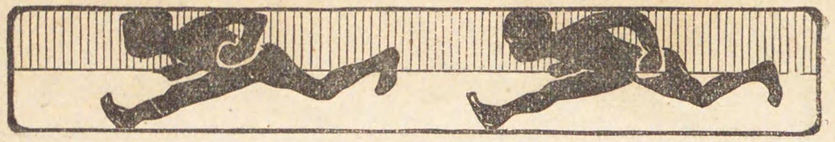
閻魔、『さうか。隣り同士でありながら、大變な相違だねえ。』

赤鬼、『はい。實に哀れな赤坊でございます。』

閻魔はまた考へて、『昨夜遲くなってから、壽命はわづか十歳で、此所へ死んで來た子供があったが、あれと丈夫さ加減は如何だ。』

赤鬼、『まづ同じ位でございませう。』

閻魔はまた頷いて、『それでは可哀さうだけれど、あれと同へ年に爲て置かう。』と言ひながら、菊本

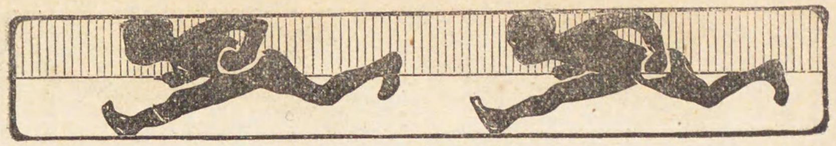


の人達の名前の次へ、清と大きく書入れて、そしてその脇の方へ、十歳と書添へました。

赤鬼は、まだ外の人々の事を注進して、そして其の日は退きました。

さて桐山太郎といふ子は、丈夫に生れました丈に、だん〳〵大きく育つに從ひ、大變な椀白者になりまして、絶えず亂暴を働きますので、誰からも憎まれて居るのです。

また菊本清の方は、弱々しい生れですから、身體の育ちも遲い代りに、温順しくってそして素直

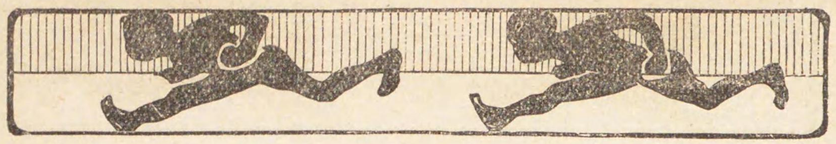


で、人に逆らふと言ふ事がありませんから、誰にも可愛がられて居るのです。

ある日の事、閻魔は赤鬼を呼びまして、『これ、あの桐山の子と菊本の子とだが、その後は、どんな風に生長を爲て居るか。』と尋ねました。

赤鬼、『はい。太郎の方は、ます〳〵丈夫になって居りますし、清も只今の所では、何うやら斯うやら生きて居ります。』

閻魔、『すでに兩人とも、七歳になった筈だが、もう小學校へ上ったか。』



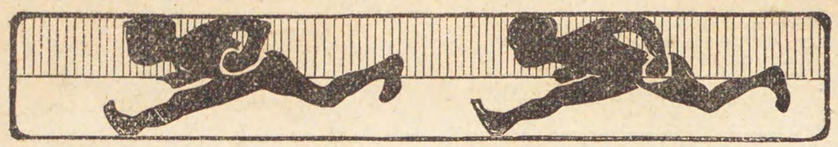
赤鬼、『左樣でございます。はや此の四月の一日に、入學を致しました。』

閻魔はきっと改まって、『それではお前に申付ける。あの兩人は今までは、まだ幼さかったから、身體の養生の事については、全で見逃して置いたけれど、すでに學校へ通ふまでになった上は、もう許しては置かれないから、もし不養生な事をすれば、どし〳〵壽命を減して遣るし、その代りに、能く養生を守ったら、壽命を增して遣る事にするゆゑ、お前が日本へ見回りに行った序に、兩人の

子供へも心を付けて、少しでも變った事があった時は、委しく私へ注進しろ。』と嚴重に命けました。

（三）

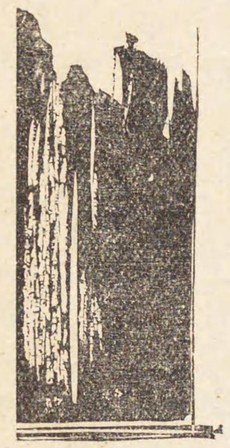
それから一月も後の事で、赤鬼は日本から地獄へ歸ると、直に閻魔の前へ出て、多勢の人々の行ひを、一々申立てまして、そして最後に、『太郎と清との行ひも、今日始めて見て參りました。』と言ひました。

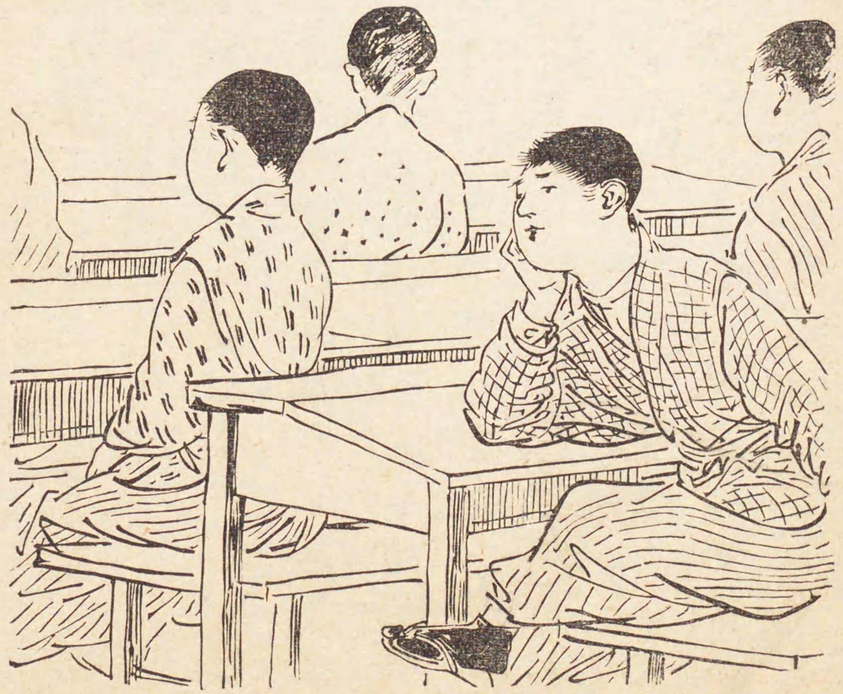


閻魔、『おー、それは大儀であった。どうだ、何方も養生を守つて居るか。』

赤鬼、『いえ、太郎は少しも守っては居りません。今日參りました時は、まだ學校の時間中でありましたので、二人の上って居る小學校へ、早速出掛けて行きまして、蔭の方から見て居りましたが、太郎は可ない子でございます。受持の先生が、『身體は成りったけ屈まないよーに、ちゃんと眞直に爲て居なさい。それでないと、行儀にも背けるし、第一身體の爲に宜しくな

いから。』と言聞せて居っしやる目の前で、腰掛へ斜に腰を掛けまして、そして前にある机の上へ、左の肱をぐっと突いて、故と屈んだり、歪ん

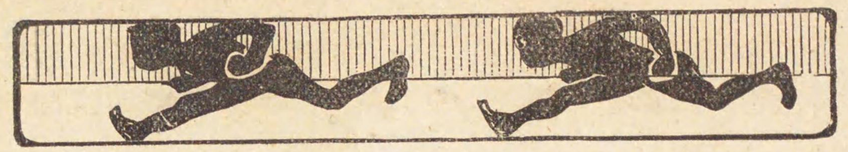




だりして居りました。』

閻魔は顔を皺めながら、『それは怪しからん事だ左様に身體を粗末にする者に、壽命をそのまゝ與へて置く事は能きない。養生の道に背く罰として、一年だけ縮めて遣る。』と、壽命帳の太郎の場所を引開けて、そして筆を取るより早く、八十歳とある所を、ぐっと棒消しに爲て了って、その傍へ、七十九歳と書換へました。

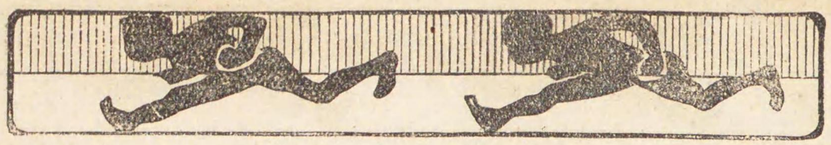
赤鬼、『所が菊本清の方は、實に感心な子でございます。同じ教室に居りましたが、先生のお詞を



ちゃんと守って、いかにも行儀好く、身體を眞直に構へて居ました。あの樣子では、先生の目の前ばかりでは無く、自分の家へ歸りましても、必と姿勢を崩さないでございませう。』

閻魔は嬉しさうに笑って、『あゝ、さうか。さう身體を大切に爲て居れば、いくら弱く生れても、おのづと壽命が延びる譯ぢや。謹み深い褒美として、一年增して遣らうよ。』と、十歳とあるのを消して、十一歳と書換へました。

赤鬼は、また一年ばかりも經ってから、『閻魔樣、



今日は久し振で、太郎と清との方へも見回りました。最初は學校へ參ったんでございますが、丁度退けた後でございましたから、直に家の方へ出掛けて、暫く目を付けて居りましたが、太郎は仍り可ません。』と言ふのです。

閻魔、『どう可ないのだ。』

赤鬼、『間食が餘り過ぎます。桐山の母親が、太郎の歸ったのを見まして、さー間食をお上りなと、餅菓子の折を出して、二つ取って渡しますと、太郎は頭を横に掉って、「二つ位ぢゃあ足りないよ、

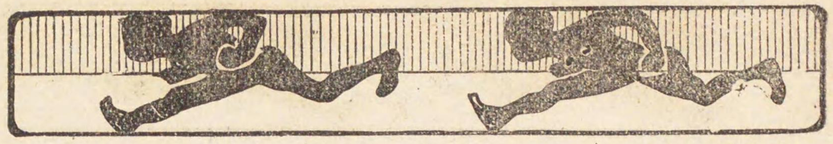
もっとおくれな」と言ひながら、狡猾にも、貰った二つを袂へ入れて、そして、折の中のを、取っては食べ、取っては食べ、小い口へ五つまで詰込んで、それからまた袂のを取出して、二つながら食べました。總〆めて七つとは、餘り食過ぎるではございませんか。』

閻魔、『能くそんなに食べられたものだ。』

赤鬼はにっと笑って、『閻魔様、また貴君に言はれませんの中に、自分から申しますが、恰で鬼に煎餅でございますよ。はゝゝゝ。』

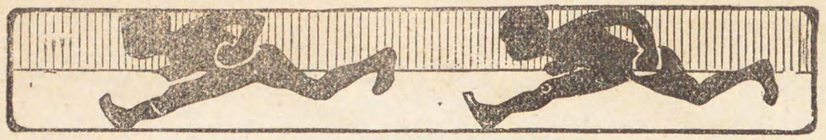
閻魔、『はゝゝゝゝ。』

赤鬼、『何しろ貴君、甘い物をそんなに食べては、どうせ身體に障る事でございませう。』



閻魔はぐっと頷いて、『さうだとも。どうも困り切った奴だ。好し〳〵。その罰として。壽命を二年縮めて遣る。』と、七十九歳を棒消しに爲て、七十七歳と書換へました。

赤鬼、『それから隣りの菊本へ參って、清の部屋を覗きますと、何所か道寄りを爲て居りました歟、丁度その時歸った所で。それで仍り母親が、檎の籃を持って出まして、「清、幾个お食べだ。」と聞ましたら、「二つは食べられるでせうけれど、學校の先生が、「間食は身の爲に宜しくないから、成りっ



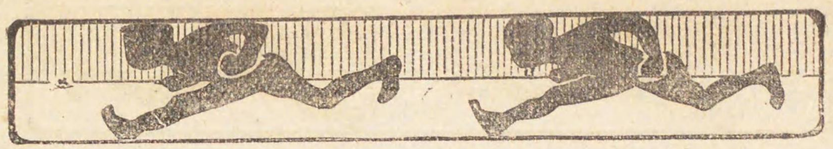
たけ少く食べな。」と仰しゃいましたから、一つに爲て置きませう。」と言って、控へ目に爲て居りました。

閻魔『感心な子だ。』

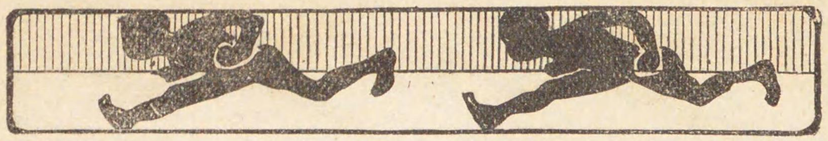
赤鬼、『あんなに身體を大切に爲て居りましたら、起る病氣も起らないでございませう。』

閻魔は筆を取上げながら、『さうだとも。その褒美として、壽命を二年延ばして遣らう。』と、十一歳とあるのを消して、十三歳と書換へました。

赤鬼は、その後また一年も經ってから、『閻魔樣、



太郎はお話に成りません。私は今度は途中で、大層手間が取れましたので、桐山へ參った時は、もう夜の十一時でございましたが、太郎は大變な宵っ張で、まだ起きて居りました。どうせ彼れでは、朝寝をする事でございませう。たゞ夫だけでも、身體の不爲でございますのに、今寝よーと申す時に、「お腹が空いた」と言出しまして、母親にお膳を出させて、うんと夜食を詰込んで、そして直に、寝所へ潛り込んで了ひました。あれでは食べた物の、消化れる間がございません。』

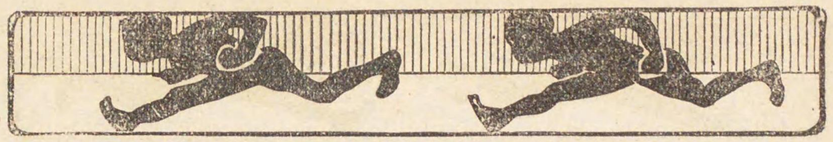


閻魔、『不養生な奴もあったものだ。聞けば聞くほど愛想が盡きて、私も呆れて了ったわい。』

赤鬼、『兎ても太郎といふ奴は、長生は能きないでございませう。』

閻魔は、『無論だ。』と言ひながら、壽命帳を引開けて、『一時に三十年縮めて遣る。』と、七十七歳とあったのを、四十七歳に書換へました。

赤鬼、『私は、それから菊本へ回りましたが、清はもう能く寝入って居りました。あの様子では、朝も早く起きる事でございませう。それに私は念

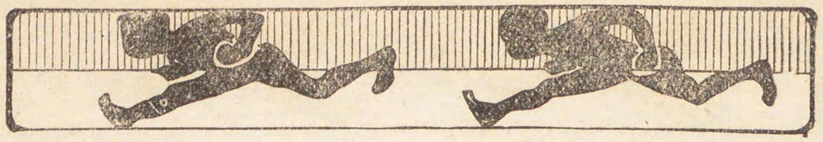


の爲に、夜食を爲たか爲なかったかと、そっと取調べて試ましたが、そんな樣子は、少しもございませんでした。』

閻魔、『さうか。清の事は、聞けば聞くほど感心で、いくら言っても褒足りない。』

赤鬼、『あれで長く續きましたら、身體は弱うございましても、病氣は決して起りますまい。』

閻魔は、『どうして。』と頭を掉って、『それが長く續いたら、身體は弱いまゝでは居ない。だん〳〵丈夫になって來るから、たゞ病氣が起らないばか



りか、壽命もおのづと延びる譯さ。だから此の帳面の上でも、今から幾許か增して遣らう。何年くらゐが好からうか。まづ十年が相應だらう。』と、十三歳といふ字を消して、二十三歳に書換へました。

赤鬼は、また〳〵一年ばかりも後、『閻魔樣、今度は太郎と清との、朝の樣子を見て參りました。』

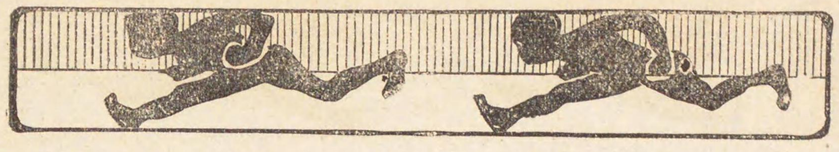
閻魔、『おゝ、それは好かった。まだ朝の樣子だけは聞かないから、實は此方から命けよーと思つて居たのさ。二人は如何な行ひを爲て居るね。』

赤鬼、『今度もまづ桐山へ參りましたが、豫て思って居りました通り、太郎は朝寢を極込

みまして、お日樣が高く登って居っしやるのに、まだ鼾の最中でございました。それで菊本へ參りますと、清はもう疾に起きて、身體を清めて、ゆるゝ朝飯を食べて居りました。間もなく夫が終っても、まだ學校へ行くのには早い爲に、御本を溫習って居りましたが、やがて時間が來ましたので、自分一人で支度を爲て、そして又ゆるゝ出掛けて參りました。』

閻魔、『成程、仍り感心しないでは居られない。』

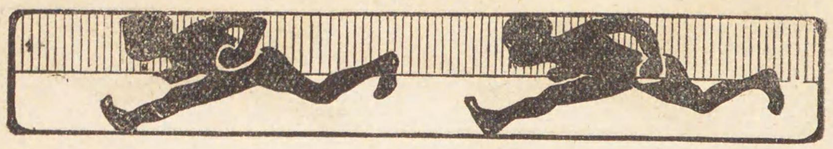
赤鬼、『私は、それから桐山へ引返しましたが、



太郎はやっと其の時に、母親に叱られて目を覺して、時間の後れた事を聞いて、慌てゝ寢間から刎起きて、そして手水を使ふにも、つるりと顔を撫でたばかりで、はやお膳の前へ座って、「あゝ遲くなった、緩くり爲ちゃあ居られない。」と、大急込みに急込んで、御飯を滿足に嚙みも爲ず、鵜呑にするのでございます。』

閻魔、『何所まで不養生な奴だらう。』

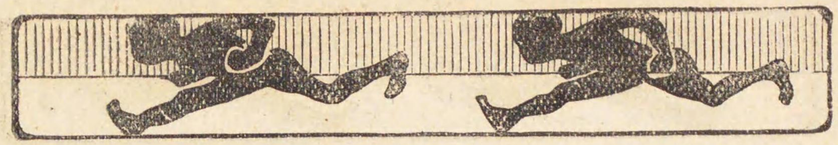
赤鬼、『それに食べて了った後も、身體の爲を思はないのでございます。養生の法から申しますと、



暫くは休憩を爲て居なければ成りませんのに、その暇が無いからではございませうが、箸を置くと直に立って、「さア阿母さん、早く爲て下さいよ。」と、親に劍突を食はせながら、一々身支度をさせて貰って、そして急かゝ駈出して參りました。』

閻魔、『あゝ、今はもう呆れもされない。壽命を二三十年も縮めなければ。』

赤鬼、『いえ、まだ夫ばかりではございません。太郎は大變なお湯嫌ひで、親から湯錢を貰ひますと、そのお錢で店屋物を買ひまして、御飯や間食

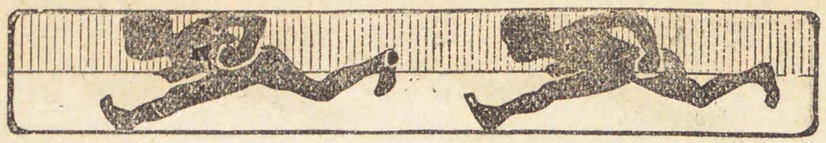


で張切れる程の腹の中へ、また安に詰込んで、湯屋へは行かないんでございますから、手足や首筋は眞黒で、頭は芥を被って居ります。どうせ身内も、垢だらけてございませうよ。』

閻魔、『それでは壽命を、たゞ縮める位では、兎ても追付く事ではない。今與へてあるだけを、みんな取上げて了ふ事だ。時に清はお湯は如何だ。』

赤鬼、『あれは清潔好きでございますから、お湯へは始終入ります。』

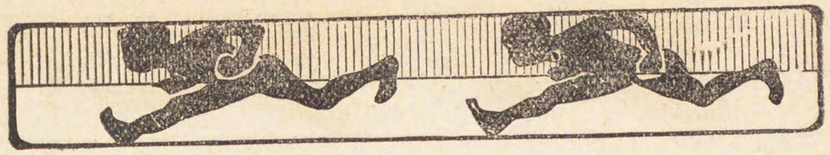
閻魔、『あゝ、それもまた感心だ。世間の子供が



みんな揃って、清のよーに心掛けたら、病氣は起らず、夭死をする者も無くなるのだ。それを思ふと、清は他の子供の手本だから、今度は一時に壽命を增して、また二十年生延びさせて遣らう。そして不養生な太郎の方は、今生きて居るだけの年に爲て、その外は殘らず取上げて遣る。』

赤鬼、『ぢゃあ太郎の命は、今年中で盡きるのでございますか。』

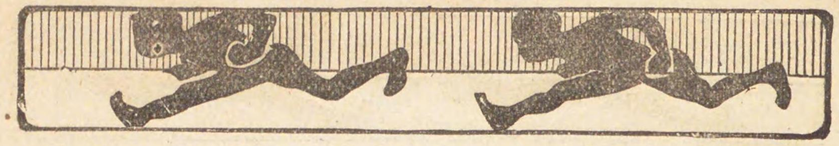
閻魔、『さうさ。そんな呆れ返った奴を、何日までも生かして置いては、不養生がおのづと他の子



供へ傳染って、皆が身體を粗末にするよーになるから、世間へ見せしめの爲に、思ひ切ってさうするのだ。』

赤鬼、『何だか可哀さうなよーでございますけれど、自分の造った罪でございますから、どーも是非がございません。』

閻魔は筆を取上げて、二十三歳の清の壽命を、四十三歳と書改め、また四十七歳であった太郎の壽命を、黑々と塗消して了ひました。

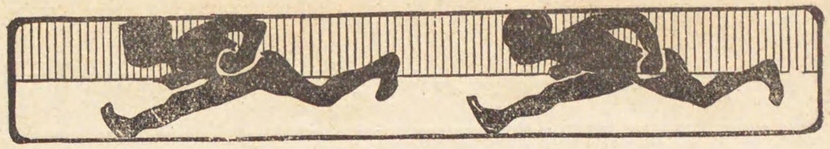


(三)

丁度その時、賽の河原の地藏菩薩が、長い錫杖を突きながら、この閻魔大王の廳へ、ぶらりと遊びに來られました。

閻魔は大層悅んで、『やあ、これはお珍しい。何か御用でもありますか。』

地藏、『いえ、毎日々々子供の世話で、ほっと爲て了ひましたから、たゞ些との隙を見て、御無沙汰見舞に來たのです。』

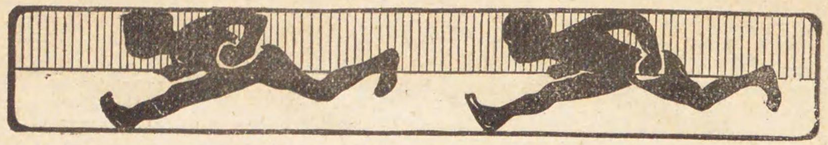


閻魔、『それは能くお出で下すった。どうか御緩りお遊び下さい。』

地藏、『有難う。貴君も何日も、お忙しい御様子ですねえ。』

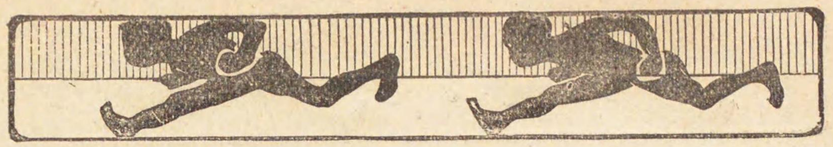
閻魔、『ほんに忙しくって困るのです、朝から晩まで、この帳面と首っ引で、全く氣が盡きて了ひますのさ。』

地藏、『それは私も同様で、



子供の世話と申すものも、それは隨分面倒ですよ。』

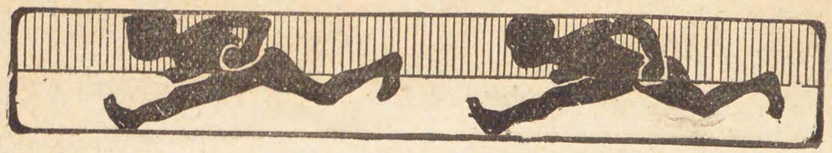
閻魔、『だって河原で石を積ませて、機嫌よく遊ばせて居っしやれば、それでお役目が濟むのですから、私の勤務とは大變な違ひです。私の方では、御存じの通り、たゞ子供だけでは無く、大人でも老人でも、世界の人間有りったけの、壽命の支配を爲て行く



のですから、實にもう堪ったものではありません。それもまだ養生の好い者に、壽命を増して遣る方は、大きに爲好くもありますし、心持も宜しいけれど、不養生を働く奴から、惜しがる命を取上げたり、また縮めたりするのは、まことに辛い仕事ですよ。』

地藏、『それはお察し申します。時にその事に就いて、貴君へお願ひ申さうと思ふ事が、ふっと心に浮びました。』

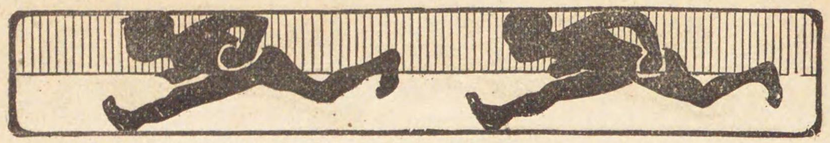
閻魔、『それは何んな事ですね。』



地藏、『なに、外ではありません。なるべく子供を死なせないやうになすって、長生をさせて遣って頂きたいのです。この頃の賽の河原は、死んで來る子供が殖えて、實にうよ〳〵して居ます。併し世話が燒切れないと言って、私の身勝手から申すのでは無いので。全くの處、夭死をする子が、可愛さうでなりませんから、お願ひ申すのですがねえ。』

閻魔、『はゝゝ。どんな事かと思ったら、貴君に似合はない御無理を仰しやる。何も私が好き好ん

で、子供を死なせるのではありません。死なせなければ成らないよーに、子供の方から爲るのです。お聞き下さい。もし養生に背いたら、命が縮まると言ふ事は、これは極り切った事で、いかに年の行かない者でも、心得て居なければなりません。また夫を心得るのは、何も別に難しくはないので、家の親達や學校の先生から、「斯うしたら身體の爲だ。斯うしたら不爲だ。」と仰しやる事を、たゞ守りさへすれば好いのです。易い事です。それであるのに、養生に背く子供は、それこそ自分が好き



好んで、命を短くするよーなものではありませんか。』

地藏、『さう承ればさうですねえ。』

閻魔、『既についぃ只今も、八十歳まで生きさせる筈の子供を、仍り不養生をする爲に、今年中に死なせる事に爲たのがあります。』

地藏、『おや〳〵、それは大變な命の縮めよーですが、どんな不養生を爲たんですね。』

閻魔は太郎の事を話しました。

地藏、『成程、それでは本人が如何にも惡い。だ

が閻魔さん、何しろ相手が子供ですから、さう急に死なせないで、どうか爲てお遣りなさいよ。』

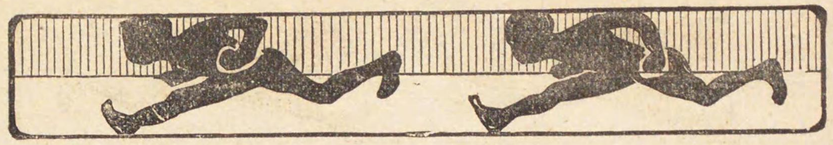
閻魔、『いえ、今更どうする事も能きません。又その代りに、養生を守る者には、ずん〳〵壽命を増して居ます。是もつい今の事で、十歳で死なせる筈の子供を、心掛けが好い爲に、四十三まで生延びさせる事に爲ました。實はこの子は、七十までも生きさせたいのですけれど、身體が丈夫でありませんので、是非なく其處までに爲て置いたのです。』

地藏、『それはまた惜しいものだ。七十まで生きさせても貰へる者が、四十三で死なゝければ成らないとは、一體その者の身體に、どんな申分があるのですね。』

閻魔はまた淸の事を話しました。

地藏、『それでは餘儀ない譯ですが、先の子供と言ひその子供と言ひ、もし本人がそんな事を知りましたら、さぞ殘念がるでせう。それは何處の子供達です。』

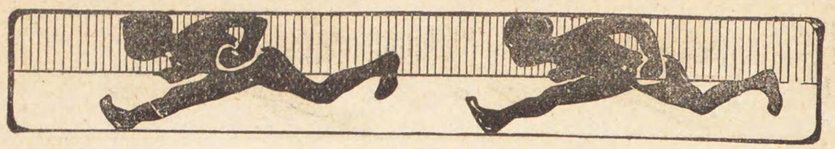
閻魔は開いたまゝの壽命帳を、ずっと前へ押遣



って、『御覽なさい。兩方とも日本人で、其處にある桐山の子と、すぐ隣りの菊本の子とです。』

地藏、『はゝあ、成程。斯うして帳面を見せて貰って、國の名も町處も、姓名までも知って見ると、私はこの太郎と清とが、一入可哀さうでなりませんから、閻魔さん、貴君へ折入って願ひます。どうか此の二人に限って、格別の不便をお加へなって、七十までも八十までも、生延びさせて下さいましよ。』

閻魔は宛も氣の毒さうに、『いえ、どうも左樣に



はなりません。お慈悲深い貴君ですから、さうまでに思ってお遣りなさるのも、御道理ではありますけれど、法を枉げる事は能きませんから、何卒もうその事は、言はないで居て下さいまし。』と、きっぱりと謝絶りました。

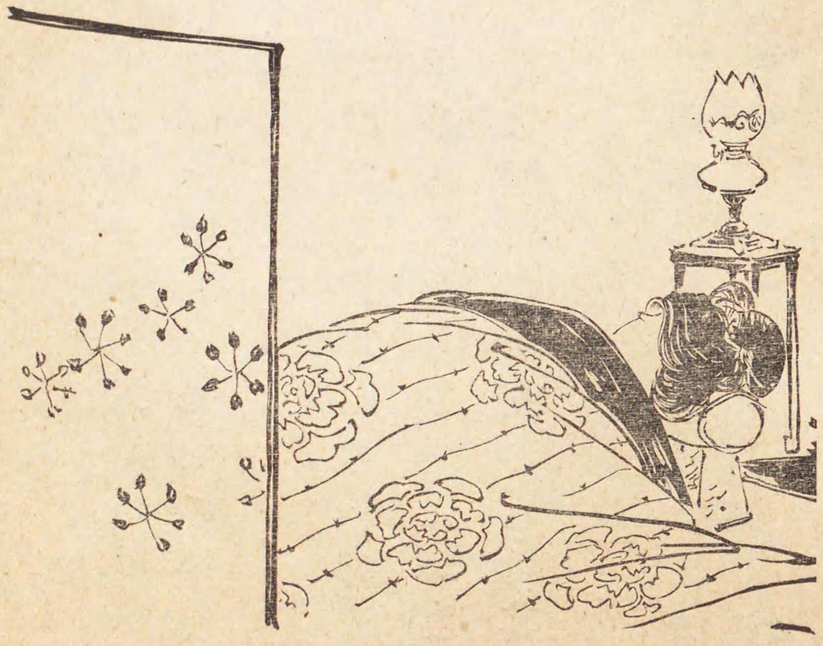
四

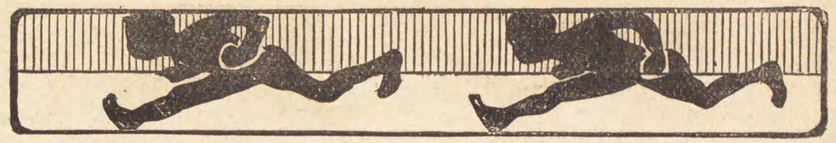
地藏菩薩は憐愍がお深い爲に、どうも聞捨てには能きなくって、その夜の夜半に、桐山太郎の母

親の處と、菊本清の母親の處と、兩方へ枕神に立って、閻魔大王から聞いた事を、委しく話して、『子供が可愛さうだと思ふなら、養生

を守らせろ。』と告げられました。

清の母親は夢の心地で、それを聞いて居ましたが、やがて氣付いて、『あゝ、今のはお地藏様のお告であったか。まー何と言ふ有難い事だらう。』と、大變に悅びまして、早速手水で





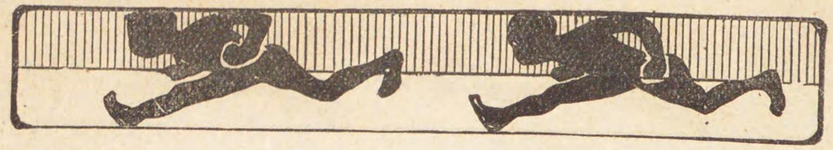
身を清めて、そして清を揺起しました。

清、『あっ、阿母さん、まだ夜が明けないんぢゃありませんか。なぜ今日に限って、こんなに早く起きるんですね。』

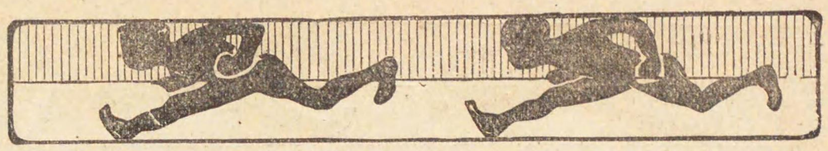
母親、『いえ、もう起きて出なと言ふんぢゃあないの。急に話して聞せる事があるからさ。たが寝たまゝで聞いて居ては、御勿體ない事だから、其處へ座ってお聞きなさい。』

清は素直に枕を離れて、蒲團の上へ座りました。

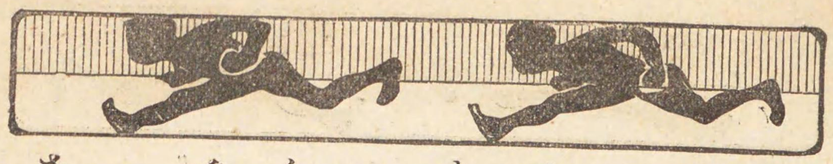
母親、『これ、今有難い事だったよ。賽の河原の



お地藏様が、お前の壽命の事に付いて、わざ〳〵入しって下すってね、「私は今日閻魔様に聞いたのだが、此處の子供は、生れた時は弱かったとかで、十歳で死ぬ筈であったさうだが、大層能く養生を守るので、四十三歳まで生延びる事になったさうだ。閻魔様が、「實は七十までも長生をさせたいが、身體が丈夫でないから」と言はれたゆゑ、本人がまだ〳〵養生に身を入れて、身體を丈夫にするやうに、親のお前から力添へを爲て遣れ。」と、御親切に仰しやって下すったよ。』



清、『おや〳〵、私は今年十一ですが、去年死ぬ所であったんですか。私の幼かった時から、阿母さんが毎日のよーに、「お前は身體が弱いゆゑ、養生を爲なければ可ないよ。」と、あんなに言って下すったんで、不養生な事と言ったら。たゞの一度も爲た事はありませんが、死ぬ筈の去年に死なゝかたっのは、全くそのお蔭ですねえ。それに一二年延びるんぢゃあ無く、極った壽命の三倍以上、四十三まで生きられるとは、あゝ、嬉しいぢゃあ有りませんか。養生は爲なければ成りませんねえ。



だが阿母さん、すぐ附上った事を云ふよーですが、成らう事なら、七十まで生延びたいもんですよ。』

母親、『さうだともさ。それも叶はない事と極って居るなら、諦めも付くけれど、身體さへ丈夫であったら、其所まで生延びられるのだからねえ。』

清、『だから丈夫に爲たいもんですが、如何したら好いんでせう。私はもう此の上に、能きよーがないと思ひますがねえ。』

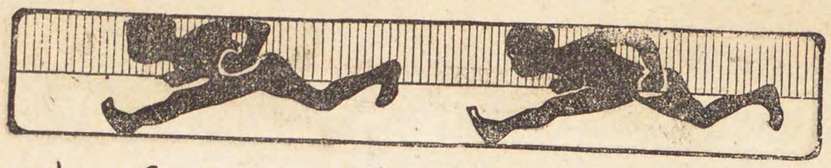
母親、『だがお地藏樣が、あんなに仰しやって下さる程だから、まだ爲足りない事があるんだらう。

お待ちよ。能く考へて試るから……、』

清、『あっ、思ひ出しました。阿母さん、まだ養生の爲足りない事がありましたっけ。』

母親、『おや、阿母さんもね、今思ひ付いた事があるの。だが先お前の方のを言つて御覽。』

清、『私が思ひ出したんは、そら、過日お話した冷水摩擦です。手拭を水で絞って、毎朝身體中を拭く事です。學校の先生が、「それを年中遣って居ると、第一風邪を引かないし、血の運りも好くなって、どんなに身體が丈夫になるか、無病長命うたがひ無しだ。」と仰しやったんで、私は直に遣る積りで、阿母さんに御相談を爲たんですが、「そんな弱い身體を水で拭いては、好くないかも知れない。」と仰しゃったもんですから、そのまゝに爲て居たんですが、これを機に思ひ切って、遣って試たら如何でせうねえ。』

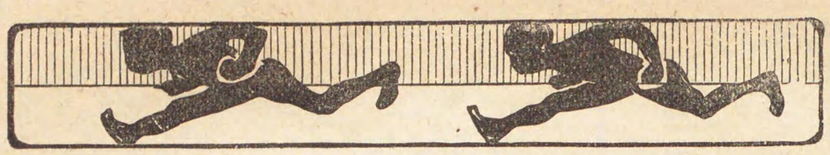


母親、『だが仍り不安心だから、夜が明けたら、一所にお醫者様へ行って、お前の身體を診て頂いて、御相談をする事に爲よーよ。そして好いと仰しゃったら、すぐ始める事に爲な。』

清、『ぢゃあさう爲ませう。そして阿母さんがお思ひ付きなすったんは、一體どんな事ですね。』

母親、『なに、運動さ。お前は勉强が好きな爲に、學校から歸って來ると、自分の机の前へ座って、少しも動かないのだから、今考へると、外の養生は達いて居ても、運動だけは足りないよーさ。だから今日から時間を極めて、散歩でもお爲だと好いねえ。勉强も肝腎だけれど、養生の爲には、運動も肝腎だからね。』

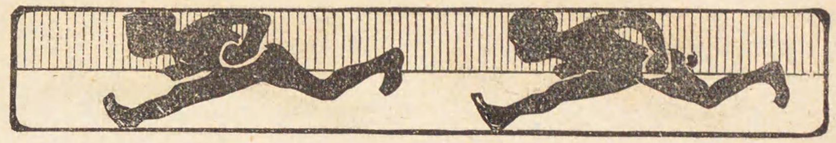
清は悅んで頷いて、『ほんとにさうです。ぢゃあ



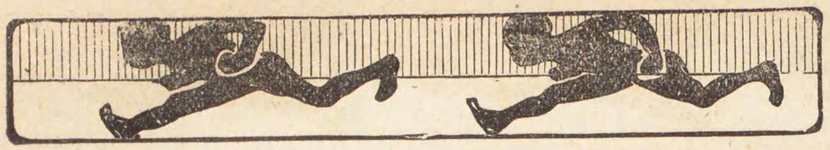
運動の方は、お醫者様に聞かなくっても好いんですから、すぐ今日から始める事に爲ませう。』と言ひました。

そして二人は、夜の明けるのを待って、お醫者の家へ行きました。

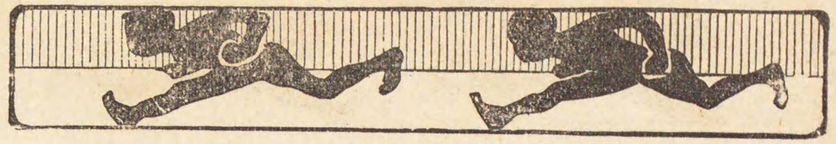
醫者は委しく話を聞いて、『それは能く御相談に入しった。身體の丈夫な者は好いが、弱い者が妄に冷水摩擦をすると、それが爲に、却って病氣を引起す事があります。すでに家へ來る病人の一人が、私に療治をさせて居る病の外に、年中風邪を



引通して居ますので、不思議に思って問ねると、冷水摩擦を爲ては惡い、極弱い身體で居て、それを毎朝行って居るのでした。その時私は、「何の爲の冷水摩擦だ、それでは詰らないではないか。」と、ふっつり止させて了ひました。冷水摩擦を行へば、丈夫になるに違ひは無い



のだけれど、身體に依っては害になるから、誰にも好いとは言へません。感心にその事にお氣付きなすって、能く勝手にお始めなさらなかった。

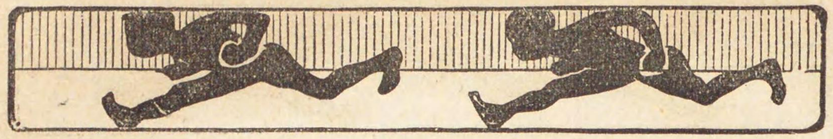


さー、此所へ入っしやい。と清の身體を診察して、『坊ちっんは大丈夫だ。冷水摩擦に堪へられますよ。』と言ひました。

清は飛上って悅んで、えっ、私は遣っても好いんですか。』

醫者、『宜しい。お身體は、餘り丈夫ではないけれど、なかく、養生が好いと見えて、此所と言ふ申し分は無いのだから、冷い水で拭いた位で、害を受けるよーな事はありません。』

清、『あゝ、さうですか。嬉しいねえく。』



醫者、『そればかりか、續けて行って居っしやれば、今は餘り丈夫でないお身體が、だんく丈夫になって來て、見違へるよーになります。』

清、『あゝ、嬉しいねえ。阿母さん、嬉しいぢゃあ有りませんか。』

母親、『ほんとにねえ。先生、その貴君のお詞で、わたくしも安心しまして、勵んで冷水摩擦がさせられます。』

醫者、『さうです。勵んでお遣らせなさい。時候も丁度温かくって、まことに好い折柄です。これ

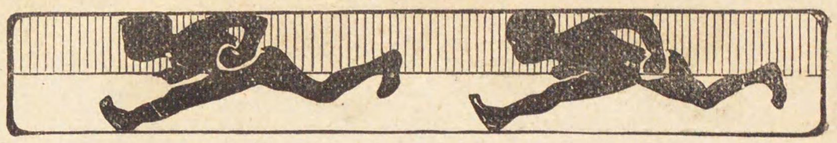
が冬の寒い時だと、つい遣始め難くもあ

るし、また無理に始めると、身體に慣れて居ない爲に、丈夫な者でも、うっかり風邪を引くことがありますけれど、今ならそんな心配はないから、早速お始めなさるが宜しい。だが中途で厭氣になって、若それを怠るよーでは、何の効もありませんから、坊ちゃん、何日までもお續けなさいよ。』

清、『はい。續けます。私は必と續けます。』

母親、『わたくしも續けさせます。決して止めさせは致しません。』

やがて二人は、勇んでお家へ歸りました。



すると隣りの桐山では、丁度その時、地藏菩薩のお告の話が、やっと始まる所でした。

太郎の母親は、昨夜お告を聞きました時、清の母親の悅んだのとは違って、大變に悲しんで、直に太郎に知らせる積りで、搖起したのですけれど、どう爲ても起きないので、是非なくそのまゝ打遣って置いて、今やうく引起したのです。

太郎はぷりく怒り出して、『阿母さん、まだ夜が明けたばかりぢゃあ有りませんか。僕は眠くって仕樣がないのに、何故また今朝に限って、こんなに早く起すんですよ。』と、叱るよーに言ふのです。

母親、『いえ、もう起きて出なと言ふんぢゃあないの。急に話して聞せる事があるからさ。それは昨夜起った事で、その時話す積りだったが、お前が目を覺さなかったから、今まで待って遣って居たの。』

太郎、『ぢゃあ寧そ待ち序に、もう二三時間待って居て下さい。僕はもっと寢たいんですから。』

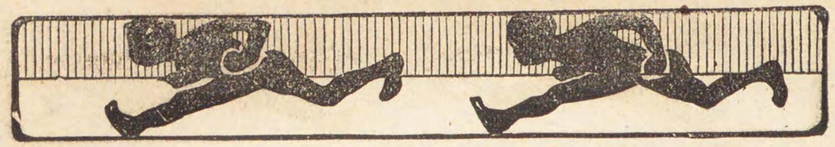
母親、『さうは待って居られない事さ。』

太郎、『だって厭さ。僕はもっと寢るんです。』

母親、『あれ、まー何所まで片意地だらう。お前はそれだから可ないの。阿母さんが口を酸くして、身の養生を爲なと言っても、片意地で聞かないから、今話さうと思ふよーな悲しい事が、不意に起って來るんだよ。これ、お前は今年中で死ぬんだよ。』

太郎、『はゝゝ。馬鹿言ってらー。神様ぢゃあ有るまいし、人間の阿母さんに、そんな事が分るもんですか。』

母親、『そりゃあ阿母さんには分らないけれど、



佛様が抑しゃったんだもの。賽の河原のお地藏様が、昨夜枕神にお立ちなすって、その通りに仰しゃったんだよ。』

太郎はこれには驚いて、『えっ、お地藏様が。』とは言ひましたが、直に笑って、『はゝゝ。嘘さ。』

母親は泣聲で、『あゝ、お前そんな事を言って居ると、罰が當って、今年中生きて居られる命までが、また急に縮まって、今日にも死ぬかも知れないよ。』

太郎は少し心配し出して、『ぢゃあ本統なんです

か。』

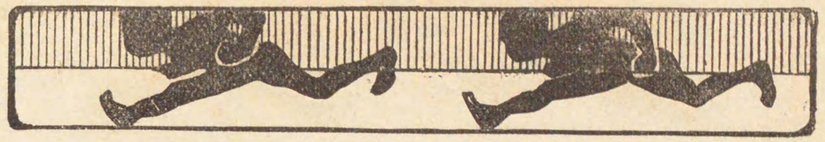
母親、『さうだともさ。まー本氣になってお聞きよ。お前は達者に生れたんで、八十まで生

きる事に極って、閻魔様の帳面に、その通り載ってあったんださうだけれど、不養生ばかり爲て居るもんだから、まだ七十年近くもある壽命を、みんな取上げられて了ったんだって』

太郎は始めて慌て出して、『そ、そりゃあ大變だ。一體誰がまた、僕の壽命を取上げるんです。』

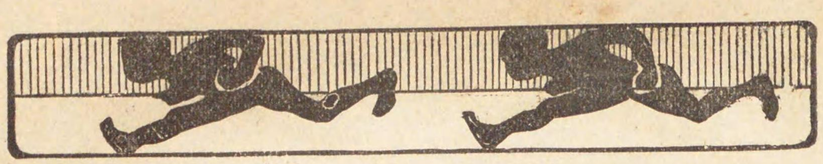
母親、『閻魔様がなさるんだとさ。まだしも直に死なゝいで、今年中だけでも生きて居られるのが、まー目付けもん位の事で、心細いぢゃあないかね。』

太郎、『さうです〳〵。あゝ、こりゃあ飛んだ事



になって了った。どうしたら好いだらう。ねえ阿母さん、どうしたら好いでせう。もう今更仕様がありますまいか。』

母親、『なに、全くさうでもないよーなの。お地藏様が仰しゃって下すったが、「能く本人に言聞かせて、今から心を入換へさせ、不養生な事と言っては、一切させないよーに爲て、身體を大事に掛けさせたら、元が達者に生れ付いた事でもあるし、また閻魔様にもお目があるから、最初に極った八十までは、それは如何だか知れないけれど、何年



かは生延ばさせて下すって、子供の内に死なせるよーな事は、蓋かなさりは爲なからう。」って。』

太郎、『さうですか。ぢゃあ僕は養生を爲ます。』

母親、『おや、お前それは本統かね。』

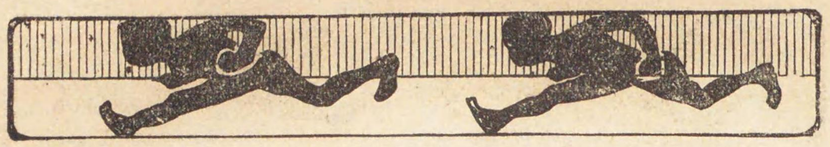
太郎、『本統です。必と養生を爲ますよ。』

母親、『だが何だか危いよーだねえ。今までの事を思ふと、どうも眞受には能きないよ。』

太郎、いえ、僕は何所までも受合ひます。折角學校へ通ひ續けて、少し物が分るよーになって居るのに、今年中くらゐで死んで了っては、餘り詰

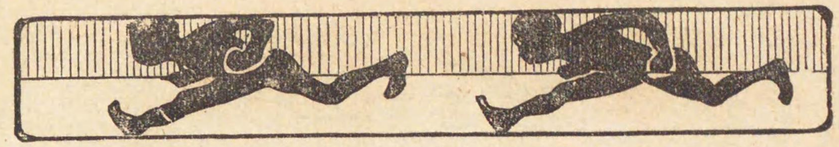
りませんからさ。それも元から弱いんなら、仕様が無いよーなもんですけれど、八十までも長生の能きる、珍しい丈夫な身體に生れて來ながら、それぢゃあ實に殘念ですから、思ふさま養生を爲て、閻魔様に取上げられた壽命だけを、僕はみんな取返して遣るんです。』

母親は大變に悅んで、『あゝ、其所までの心になっておくれだったら、元の八十までは生きられないでも、それに近い所までは、長生が能きるかも知れないよ。』



太郎、『だが阿母さん、僕は養生を爲た事がないんですから、少しも勝手が分りませんが、今まで惡いく〳〵と言はれて居た事を、ずっかり止して了った上で、それを反對に遣って行けば、大方好いんでせうねえ。』

母親、『まーさうさ。まー言って試よーなら、朝は早く起きて、夜は早く寢て、食物は食過ぎないよーに、又ゆる〳〵食べるよーに、そしてお夜食は止めに爲て、お湯へも度々入るよーに、身體の備へも崩さないよーに……ざっと夫だけの事が

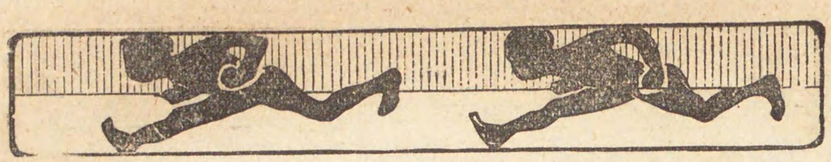


守れたら、まづ好いだらうかねえ。』

太郎、『ぢゃあ其の通り守ります。まだ外に有るかも知れませんから、學校の先生に伺って、お指圖を爲て下すったら、それも一所に守ります。』

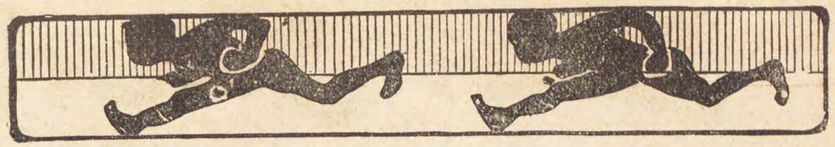
母親は念を押して、『だがたゞ口先で言ふばかりでは、何の役にも立たないよ。それを長く續けなければ、養生には成らないよ。』

太郎はきっぱりした聲で、『必と續けてお目に掛けます。』と言ひました。



（五）

地獄の閻魔大王は、今また赤鬼の注進を聞きまして、怖い顔に笑ひを見せつゝ、『さうか。清は大決心を以て、冷水摩擦を遣出したか。なに、運動も始めたか。あゝ、また感心をさせられた。壽命を十年增して遣らうよ。隣りの太郎も養生を爲出したとか。はゝゝ。珍しい事もあったものだ。あれは元が達者だから、本氣に養生を爲出したら、全く鬼に金棒さ。』



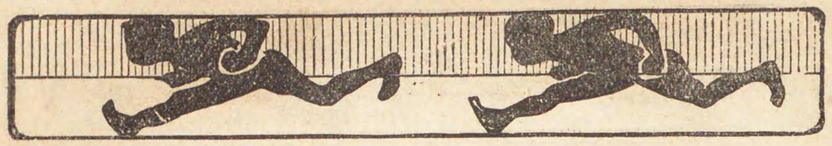
赤鬼、『はゝゝ。また私の事を仰しゃいますね。』

閻魔、『はゝゝゝ。何しろ太郎にも感心をさせられたとは、珍しい事もあったものだ。あれにも壽命を十年増さうよ。』

赤鬼は、その後また二人を注進しました。

閻魔、『なに、清は運動も冷水摩擦も、怠らないで續けて居るか。感心だ。また十年増して遣らうよ。太郎も仍り怠らず、養生を守って居るか。これもまた感心だ。十年増さうよ。』

赤鬼は、その後また〳〵御注進。



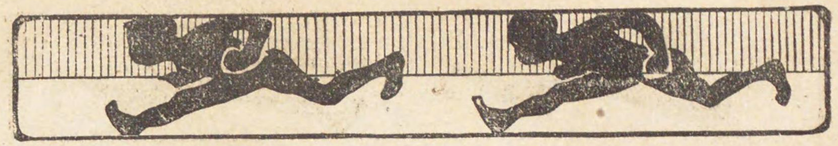
閻魔は大層悦んで、『さうか。清は養生の効が見えて、恰で生れ變ったよーに、身體が丸々太って來て、そして色艶も好くなったか。あゝ、それでは丈夫になったのだ。今から五十年や六十年は、弱るよーな愁ひは無いから、思ひ切って長生をさせて遣らう。太郎は如何だ。さうか。相替らず養生を勵んで居るか。これも思ひ切って長生をさせて遣らう。だが太郎は最初の内に、不養生を爲た咎があるから、幼い時から養生を爲續けて居る清とは、同じ長生はさせられない。十年くらゐは、

下げて置かなければ成るまいよ。」

さて閻魔が筆を取って、新に帳面へ書入れたのを見ますと、十歳で死ぬ筈であった清の壽命は、八十歳とありまして、十一

歳で死ぬ筈であった太郎の壽命は、七十歳とありました。

その後は太郎も清も、少しも養生を怠らないで、數十年を無事に暮して、今年は二人とも六十五



歳で、大爺さんになって居ますが、まだ中々達者なもので、若い者は跳で逃げる程ですとさ。

めでたし〳〵。

257
496

壽命帳

明治四十一年六月二十八日印刷
明治四十一年七月五日發行

著作者　東京市本所區相生町五丁目參拾番地　武田穎

發行者　東京市京橋區南傳馬町貳丁目五番地　目黑甚七

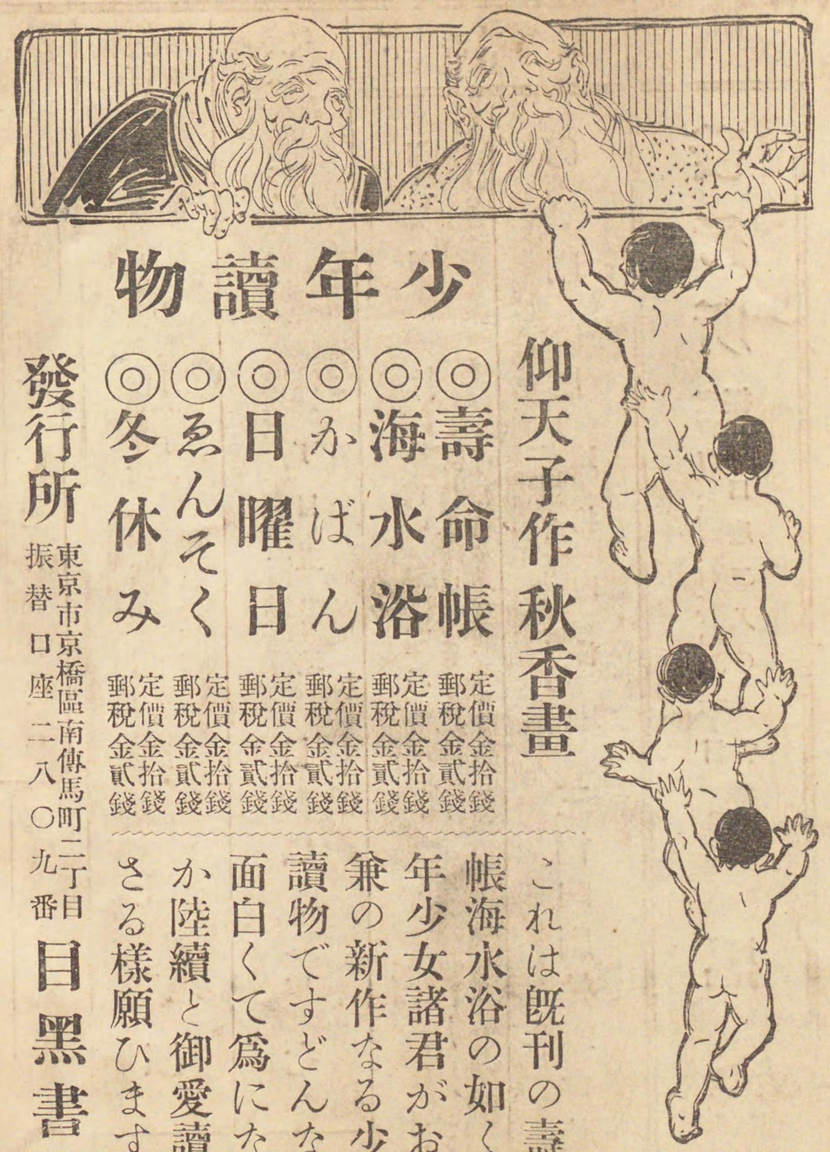
定價金拾錢

印刷者　東京市京橋區弓町貳拾四番地　高塚慶次

印刷所　東京市京橋區弓町貳拾四番地　三協印刷株式會社

不許複製

發行所　東京市京橋區南傳馬町二丁目
振替口座二八〇九番　目黑書店



少年讀物

仰天子作 秋香畫

◎壽命帳　定價金拾錢　郵税金貳錢

◎海水浴　定價金拾錢　郵税金貳錢

◎かばん　定價金拾錢　郵税金貳錢

◎日曜日　定價金拾錢　郵税金貳錢

◎ゑんそく　定價金拾錢　郵税金貳錢

◎冬休み　定價金拾錢　郵税金貳錢

これは既刊の壽命帳海水浴の如く少年少女諸君がお待兼の新作なる少年讀物ですどんなに面白くて爲になるか陸續と御愛讀下さる樣願ひます

發行所　東京市京橋區南傳馬町二丁目　振替口座二八〇九番　目黑書店